
毒婦

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毒婦

【Nコード】

N3418F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

信濃で何やら異変が見られた。事態を重く見た武田晴信は春日源介という美貌の若者を解決に向かわせる。源介が出会う怪異とは。武田家きつての名臣高坂昌信の若き日のお話です。

第一章

毒婦

信濃の国の話である。この時この国は戦国の中にあつたがそれが大きく変わろうとしていた。

甲斐の虎武田晴信。彼が信濃に進出し豪族達を次々と攻め滅ぼし、追放していった。今や信濃は彼の軍門に下ろうとしていたのであつた。

だがそれは決して悪いことではなかつた。晴信は戦略家、戦術家としてだけでなく政治家としても傑出していた人物であつたのだ。法を整備し民を治め、地を豊かにした。その為信濃の者達も晴信になつくようになっていた。こうして信濃は瞬く間に武田の領地になろうとしていたのであつた。北にはまだ村上、小笠原といった強敵がいたがそれでも順調に領土を増やしていつていた。武田の勢力は大きく伸びようとしていた時であつた。

そんな時であつた。甲斐と信濃の境にある村の一つで奇怪な事件が起きていたのじゃ。

「またか」

「ああ、またじゃ」

村人達は墓を掘りながら互いに言い合う。彼等はやりきれないといつた顔で墓を掘っていた。

「こつも続けて死んでいくとな」

「うむ」

彼等は顔を見合せて言う。

「やはりおかしいじやろう」

「しかも若く美しい男ばかりが。どうしてじやろうな」

この奇怪な事件のことはすぐに晴信の耳にも伝わった。彼は甲斐の躑躅ヶ崎館においてその話を聞いた。

武田は城よりも人材を重んじる傾向があつたとされている。人が

城であり人が石垣であるとは晴信自身の言葉である。その為この館も武田の拠点としては然程守りの堅いものではなかった。彼は城よりも人に重きを置いていたのである。

彼はこの館において話を聞いた。重厚な顔立ちでどっしりとした雰囲気の方が館の中の主の座に控えていた。

「それはまことか」

晴信はそれを聞くとまず報告した家臣の一人に問うた。その家臣の左右には武田の重臣達が控えている。中には晴信の弟達もいる。彼等こそが晴信にとっての城であった。

「はっ、民達はこのことに動揺を覚えているようにございます」

「そうであるうな」

晴信はそれを聞いてまずは頷いた。

「その様な奇怪なことになっておればな」

「はい」

「その話、捨ておけぬ」

彼は言った。

「すぐに事の詳細を明らかにし、民の不安を取り除くぞ」

「ですが御館様」

そこに控える重臣達が彼に顔を向けてきた。

「一体どのようにして」

「どのように、か」

「左様です」

どうやってそれを解決するか、それが肝心なのである。彼等の関心はそこであった。

だが晴信も伊達に父を追いついて国を掌握し、若くして領主としても武将としても名を挙げているわけではない。もうそれは考えが及んでいた。彼はそれを述べた。

「人を遣わす」

「人をですか」

「そうじゃ、とっておきの者があるではないか」

「それは一体」

重臣達の中でも上座にいる晴信によく似た男が問うてきた。彼の名は武田信繁。晴信の実の弟であり彼の片腕として武田家を支えている男である。彼こそは武田の副将であるとまで言われていた。晴信にとつては彼の腹心中の腹心であり最も頼りにしている者である。

「春日じゃ」

「春日」

「あの者ですか」

信繁を含めて重臣達はその名を耳にして様子を変えてきた。

「そうじゃ、あの者ならば問題ないと思うが」

「確かに」

「春日なら大任を果たしてくれましょう」

武田でも名の知られた者達が一樣に納得したように頷く。だがここで信繁はあえて兄に対して述べた。

「ですが御館様」

「まだ何かあるか」

「春日では少し目立ちませぬか」

「言われてみれば」

「確かに」

重臣達もそれに応える。

「何しろあの者は」

「あれだけだと」

「何、それも考えてのことじゃ」

晴信は重臣達の声の耳に大きく笑ってきた。

「確かにあの者は目立つな」

「はい」

「まことに」

「だからじゃ。それだけに話の解決には向かう」

「左様ですか」

「一先話が向けばな、後はあの者が自分でやる。それで終わりじゃ」

「そうでしたら」

「ここはあの者に任せましょう」

「吉報を待つておれ」

晴信は大きく構えて言った。

「じきにこの話は事の仔細がはつきりしたうえで終わるからな」

「はい」

「それでは」

重臣達は皆一様に頭を垂れた。晴信は最早父信虎以来の重臣達をも心服させていた。血縁の者も多いが若くして老臣達を従えさせるものが彼にはあった。だからこそ。皆彼の言葉を信じ吉報を待つのであった。

その頃中山道を甲斐から西に進む一人の若者がいた。道行く人や道の側の村人達は擦れ違っただけで思わず振り返らせてしまっていた。

「何と」

「あの様な者がいたとは」

その格好は普通の旅装束であった。腰に刀を差し編笠を被っている。その格好を見るに武士であることがわかる。だが人々を振り返らせていたのはその顔にあった。

見れば女と見間違っばかりの麗しい顔であった。切れ長の目は清らかに澄み肌は紙の様に白くきめ細かい。これだけの肌を持つているのは女でもそうはいない。唇と頬は赤くまるで紅をさしたようである。鼻立ちも唇も形がよくまるで人形のようなのである。彼こそが晴信が話の解決の為に送り出した者、春日源介であった。

甲斐国の豪農である春日家に生まれ十六で晴信に召抱えられた。その美貌と才覚により晴信に愛され奥近習となっている。この時十八、晴信にとっては期待の家臣の一人であった。

その美男子が今甲斐から信濃に向かっていった。行く先は一つ、騒動が起こっている村であった。

「あなれまあ」

彼を見た農婦の一人がまず声をあげた。

「どうしたんだ、御前」

「あんた見なよ」

隣で畑を耕していた夫に声をかける。

「あそこにとても奇麗なお侍様が」

「奇麗な!？」

彼はそれを聞いて顔をあげた。すると彼も思わず声をあげてしまった。

「おお、これはまた」

「なあ、凄い奇麗な人だろ」

「女ではないわな」

「まさか」

「いや、あの顔は女のものじゃぞ」

こちらに歩いてくる源介を見て言う。

「そうでなかったら何じゃ」

「ああ、ちよつと」

丁度すぐの場所まで来たところで源介は苦笑いを浮かべて道の端からその農夫に声をかけてきた。その声も麗しいものでやはり女のものにも聞こえる。そんな声だった。

第二章

「私は男だぞ」

「まことですか」

「まことも何も嘘を言う必要もない」

彼はその苦笑いを素直な笑いに変えて述べた。

「違うか？どうしてここで嘘を言うことがある」

「そういえばそうですね」

農夫はそれを聞いて納得したように頷いた。

「申し訳ありませんでした、ついついそのお顔を見て」

「まあ顔のことはいい」

源介はそう言っただけはそれをよしとした。そのうえでまた述べた。

「それでな」

「はい」

話は移った。

「ここの庄屋は何処かな」

「庄屋といえますと」

「庄屋と言えば庄屋だ」

源介は農夫のその言葉を聞いて異様なものを感じた。見れば横にいる彼の妻も目を不安なものにさせている。

「いる筈だと思うが」

「ええ、まあ」

農夫はまずはそれに応えた。

「いることはいますが」

「何かあるのか？」

「どちらの庄屋様でありましょうか」

「どちらの」

それを聞いて眉を顰めさせた。

「はい、古い庄屋様と新しい庄屋様がおりますが」
「待て」

あまりにも訳のわからない話に源介は眉を顰めさせたまま一旦話を止めさせた。

「どういふことなのだ、それは」

「いえ、ですから庄屋様のことでしたら」

「この村の庄屋は海野大五郎ではないのか」

「海野様でしたらおりますが」

「それを早く言え。そして海野は何処にいるのか」

「あちらでございます」

そう言つて指差した先は質素な家であつた。屋敷と呼ぶのも憚れるような、そんな家であつた。庄屋の家とは思えない。源介の生家よりも粗末な様子であつた。

「あそこなのだな」

「へい」

農夫は答えた。どうやら間違いではないらしい。

「どうされますか」

「うむ、その庄屋に用があつてな」

「というところのことだ」

「ちよつとあんた」

ふと何か言おうとした夫を女房が押さえた。

「下手なことは言わない方がいいよ」

「おつとそうじゃつた」

だが源介にはそれで充分だつた。彼はそれだけでもう村の異変を確信したのであつた。だがそれはあえて口には出さない。そしてその庄屋の家に向かうのであつた。

「ではな」

その前に農夫達に別れを告げた。

「教えてくれてどうも」

「いえいえこちらこそ」

「ではまた。顔のいいお武家様」

そう言われながら庄屋の家に入った。笠を脱いでそれを脇に抱えて中に入るとやはり普通の農家と変わりがなかった。土蔵の中に進んで人を呼んだ。

「誰かおらぬか」

「はい」

声に応えて一人の年老いた男が姿を現わした。

「庄屋はおらぬか」

「私でございますか」

「その方がか」

それを受けてじっと老人を見る。どうにも庄屋ではなく普通の農夫に見える。

「海野大五郎だな」

「左様です」

老人は小さな声で応えた。やはり間違いはなかった。

「そうか、その方がか」

「して貴方様は」

「私か」

「はい、お武家様とお見受けしますが」

「うむ、春日源介という」

「春日様というと確か御館様の」

「私を知っているのか」

「はい、近頃殿様のお側に仕えられる若い方でその様な方がおられると聞いておりまして」

「そうだったのか」

「それが貴方様でしたか、いやこれはまた」

大五郎は源介の顔をまじまじと眺めながらその年老いた顔を綻ばせてきた。

「お美しい。噂には聞き及んでいましたが」

「まあ今は私の顔のことはいい」

源介はその若く美しい顔に苦笑いを浮かべてその話題を止めさせた。

「実はな。御館様に言われてな」

「といいますと」

大五郎の様子が変わった。何やら鋭い雰囲気になった。その変化に源介も気付いた。そして心の中で呟いた。

（この老人、意外と）

できると思った。その年老いた力ない様子は芝居であり実は中々の出来物であると呼んでいた。だがそれは口には出さなかった。それを胸に収めながら話を続けた。

「何か。この村であるそうだな」

「はい」

大五郎は鋭い目の光を隠して彼に応えた。

「そのことです」

「そして村に入ったところで村人達から妙な話を聞いた」

「庄屋のことでしょうか」

「知っているか」

「この村のことでしたら。私は庄屋ですので」

剣呑なものさえそこには忍んでいた。そうした声と雰囲気をこの老人は潜ませていた。

「庄屋が二つあることですね」

「そうだ。何か心当たりがあるな」

「勿論です。ですがここでお話も何ですから」

大五郎はそう言つて源介を上にあげた。そこで向かい合つて座り話を始めた。

「まあこれでも」

「かたじけない」

水が差し出された。それを飲みながら話に入る。

「近頃村では妙なことが続いております」

「左様か」

「はい、一年程前にここにふらりと歩き巫女と称する若い女が来まして」

「歩き巫女のう」

源介はそれを聞き更に怪しいと思った。歩き巫女の中には普通に巫女をしている者もいれば春もひさぐ者もあり時には密偵の仮の姿であったり妖かしの類であったりするのだ。そういうことを知っているからこそ怪しいと思ったのだ。

「はい、最初は占い等をして真面目にやっていました」

「春でもひさいだか」

「いえ、そんな生易しいものではございません」

大五郎はその皺だらけの顔を顰めさせて言った。

「何分美しい顔でして。言い寄る男もありました」

「ふむ」

「そうした者は一旦はその巫女と一夜を共にするのですが翌日は」

「どうなっているのだ」

「仏になっております」

「どの者もか」

「はい、そのうちに巫女は男共の金やらを手に入れ何処からともなく招き寄せた得体の知れぬ者達を従え遂には村の端に大きな屋敷を構えまして」

「それが新しい庄屋か」

「左様でございます。今ではもうこの村を仕切るようにさえなっております」

「それはいかんな」

源介はそれを聞いてすぐにそれを否定した。

「御館様はこの村の庄屋はそなたと決めておる」

「はい」

「それなのに急に新しい庄屋とは。しかも得体の知れぬ歩き巫女などを」

「ですがもう誰も逆らえないのです」

大五郎はこうも述べた。

「その女だけでなく周りの者達も腕っぷしが強く」

「どうしようもないというのだな」

「そのうち大事になるかと心配していたのですが」

「だからこそ私が来たのだ」

源介はここでこう述べた。

「この話を終わらせる為にな」

「はあ」

「そしてだ」

彼はそのうえで問う。

「その新しい庄屋、歩き巫女とはどんな者なのだ」

「名は管姫と申します」

「管姫か」

「はい、それが何か」

「いや、何もな」

だがその名を聞いたところで彼にはふと気付くものがあつた。

第三章

「そう名乗っております」

「その姫に近寄った男は誰でもだな」

「はい、誰一人として生きて帰った者はありません」
大五郎は言う。

「誰一人として」

「そして村ではもう何も出来ぬと」

「情ない話ですが」

「何、構うことはない。その為に私が来たのだ」

源介は強い声でこう述べた。

「だからな」

「何かお考えが」

「まずは女のやり方を知りたい」

「女のですか」 4

「そうだ、何か知っているか」

「とにかく男を好みます」

「男をか」

「はい。若い男や余所者を引き込み」

「ふむ」

源介は大五郎の話に聞き込む。

「翌日には引き込まれた男は骸になっております」

「妖かしの類に近いと見受けられるが」

「それは私事です」

また大五郎の目が光った。

「ですから今まで村では何も出来ませんでした」

「化け物だからか」

「流石に。人間ではないとなると皆怖気づいてしましまして」

「だろうな。それは仕方がない」

それで村人達を咎める気にはならなかった。相手が異形の者ならばどうしようもない、そう考えるのが妥当であるからだ。しかし源介は違っていた。伊達に晴信に単身ここまで遣わされたわけではないのだ。

「妖かしとなると」

「何かお考えがありますか」

「そうだな」

その整った顎に手を当てて考えに耽る。すると実に賢く、そして頼もしい顔になる。まだ若者であるというのにその顔には優れた智謀の士としての顔が見られた。

「虎穴にはらずんば虎児を得ず」

ふとこう呟いた。

「中に入らねばどうしようもありません」

「ですがそれは」

「何、わかっておる」

源介は大五郎が心配するような顔になったのでそれを宥める為に笑顔で応えた。

「下手をすれば命がないというのだな」

「そうです、本当に妖かしであつたならば」

「鬼だろつが魍魎だろつが恐れることはないのだ」

彼は強い声で述べる。

「どのみち敵であることに変わりはない。そしてな」

「はい」

「かつて鬼も魍魎も幾度も倒されてきておる。倒せぬ妖かしなぞおらんのだ」

「ではあの女の」

「人であっても魔物であつても切ってみせる」

「何者であつてもですか」

「そつだ、だから安心しておれ」

こうまで述べた。

「必ずや首を取って参る」

「そこまで覚悟がおりでしたら私はもう言うことはありません」

大五郎は源介の言葉を受け取った。そしてそれを認めることにしたのだ。

「御武運を御祈りします」

「かたじけないな」

「ただ、女は女です」

「うむ」

「夜に御注意を」

「夜にだな」

「はい。それではまた」

「うむ、またな」

二人は別れを交あわせた。それは永遠の別れではなかった。源介は魔物なぞ恐れてはいなかった。どんな魔物であろうとも倒す、そうした自信が確かにあった。そして、今女のいる屋敷に向かうのであった。

女のいる屋敷はよいものであった。大五郎のそれが一軒家と変わらないのに対してこちらのは本当に見事な屋敷であった。壁まで白く整っていた。

「まるで殿の御側におられる方々の御屋敷のようだな」

源介はその白い壁と立派な屋敷を見て思った。武田の重臣達はやはりそれなりの家に住んでいる。それは源介のような若輩にとっては夢の様な家であった。それを思い出したのである。

「ここまでなるのに。どれだけの金と人がいったのか」

それを考えるだけで怪しいものがあつた。屋敷からは何か得体の知れぬ気まで感じる。源介はそれを察しながら身構えてすらいいた。

「おい」

その屋敷の門に向かう彼に声がかけられてきた。

「その男」

「それは拙者のことか」

「そうだ、屋敷に何か用か」

見れば門のところに一人の男が立っていた。陰のある眦を持つ大男であった。服の間から毛と異様なまでに盛り上がった筋肉が見える。優に源介の三倍はあろうかという身体であった。

「あるといえばある」

源介はその巨体に臆することなく述べた。

「私は旅人なのだが」

「旅人か」

「そうだ、宿を探している。主人はいるか」

「この屋敷に宿を借りたいというのだな」

「その通りだ」

男を見上げて言う。

「駄目か」

「まだ駄目とは言っていない」

男は答えた。

「見たところ卑しい男ではないな」

男は源介をその陰のある目で見回しながら述べた。

「そうじゃな」

「お待ちや」

ここで後ろから女の声がした。

「誰と話しておるのじゃ？」

「あつ、これは」

男はその声を受けて顔を後ろに向けた。見ればそこには緑と赤の豪華な着物を纏った女がいた。切れ長の少し吊り上がった黒い目を持ち、細い顔を持っている。尖った印象を受ける顔でそれがどうにも狐を思わせる。だが整ってはいた。誘い込まれる様な、そんな霽囲気的女であった。髪は黒く、闇の様にそこにあった。それが着物の色に比して互いを際立たせていた。それが実に妖しい姿であった。

「実は旅の男が来まして」

「男」

それを聞いた女の顔がピクリと動いた。源介はそれを見逃さなかつた。

「若い男かえ？」

「はい、どうされますか」

「その男は何処におるのじゃ？」

「そこにおりますが」

そう言つて源介を指差す。それを受けて源介を見ると女の顔は妖しく微笑んだのであつた。まるで獲物を見つけた狐のようである。

「ほほお」

源介の顔を見ると同時に目が微かに動いた。彼はそれを見て咄嗟に目だけを逸らさせた。そこに何か奇怪な光を感じたからであつた。

「これはよい男じゃな。美しい」

「御氣に召されましたか」

「うむ。これ」

男に応えると同時に源介に声をかけてきた。

第四章

「この屋敷に一晩泊まりたいのじゃな」

「はい」

源介は静かに答えた。

「御許しさえあれば」

「よいぞ」

女は笑いながら述べた。

「この管姫困っている者の願いを邪険にはせぬ」

「左様ですか」

「そうじゃ。だから入るがいい。遠慮はいらんぞ」

「有り難うございます」

源介はとりあえずは礼を述べた。まずは屋敷の中に入ることができた。だがその中は。異形の匂いに満ちていたのであった。妖かしとは剣を交えたことのない彼にもそれはわかった。

「よくぞおいで下さいました」

先を案内する男が広い廊下を進みながら彼に声をかけてきた。

「ここに来られるとは運がいい」

「それがしもまさかこの様な場所にこれ程の屋敷があるとは」

「意外でござるか」

「はい」

その言葉に頷いた。見ればその案内役からも妖しい気配が立ち込めている。

「管姫様でございましたな」

「ええ」

「武田の姫様であられますか？」

「武田ですか」

その名を聞いたところで男の口調が微妙に変わった。

「御冗談を」

「といたします」

その口調の変化が嘲笑によるものであることを彼は見抜いていた。主の家を嘲られ不快なものを感じずにはいらなかったがそれは隠していた。

「我が姫様はあの様な馬の骨ではありませんぬ」

「武田をしてですか」

「はい。姫様は古い家の方」

「ほお」

この言葉から源介は管姫もまた尋常ならざる世界の者であるとわかった。甲斐源氏以来長き渡つて甲斐を治めてきた武田家は室町幕府が力を持っていた頃から、いやそれより前の鎌倉幕府の頃から一目置かれる存在であつた。名門と呼ばれるに相応しい家であつた。その格式は駿河と遠江を領有し將軍の継承権まで持つ今川をしても侮れないものがあつた。それ程までに格式が高いとされていたのだ。その武田をそこまで言えること、それに加えて屋敷の中に満ちる妖気もあつた。そうしたことから彼は管姫もまた人ならざる者だと看破したのであつた。

「武田ではまだまだです」

「そうなのですか」

「我等は長い間国を求めていました」

彼はこうも述べた。

「その国こそがここです。今は力を蓄えているだけです」

「そうなのですか」

ここで源介は自分はすぐにも命を狙われるということもわかった。この様な会話を平気で話すからには。口封じは必ず行われると読んでいたのだ。そしてその読みは当たることになる。

「まあ今日はゆうつりとお休み下さい」

男はここで源介を一室に案内した。

「こちらで。後で食事を持って参りますので」

「かたじけない。それでは」

「はい」

こうして彼は部屋に案内され一人となった。部屋の中は畳が敷かれ襖で囲まれた何の変哲もない部屋であった。むしろ品がある程である。だがそこもまた妖気に満ちていた。源介はその中に座るとこれからのことについて思案を巡らしはじめたのであった。

「まずは中に入ることができた」

最初の関門は潜り抜けた。

「だが」

それで終わりというわけにはいかない。むしろ大事なのはこれからであった。

「次は食事か」

おおよそどんな食事が出て来るのか予想はついていた。どういった料理が出るのかは問題ではなかった。ここで彼が予想していたのはその中にあるものである。それがあるのは間違いないとさえ思っていた。

「これに関しては」

もう考えがあつた。それを実行に移そうとしたところで襖の向こうから声がしてきた。

「もし」

「はい」

中年の女の声であつた。何処か嫌らしい響きがあつた。

「食事を持って参りました」

「左様ですか」

「はい、どうぞ」

そして女中が食卓を持って入って来た。見れば声から思ったように嫌らしい雰囲気の中年の女であつた。まるで何かを企んでいるような。そうした物腰であつた。

「こちらです」

「ふむ」

見れば白い米に漬物、そして魚と野菜であつた。中々いい食事で

あつた。

「どうぞ召し上げれ」

「それでは」

橋を取り数口入れる。だがそれだけで食事を終えた。

「あら、もうですか」

「どうも腹が減っておりませんので」

苦笑いを作つてこう述べた。

「もう結構です」

「そうですか。ではこれで」

「済みませぬな」

「いえいえ、それならば仕方ありませんから」

片付ける女中の目が一瞬だが鋭く光った。彼はそれを見逃さなかつた。

「では後で酒でも」

「すみませんな。ところで」

「はい」

ここで女中に声をかけた。

「廁は何処ですか」

「それでしいたら廊下を出まして」

女中から廁の場所を聞く。それを聞くとすぐにそこへ向かった。

そしてその中で今しがた食べた僅かなものも吐き出した。念の為である。

「これで食事は抜けた」

食事には間違いなく毒が入っていた。女中の目の光がそれを教えていた。

だが。それで終わりではないのも女中の目は教えていたのだ。

「酒だな、次は」

酒を持って来ると言っていた。それに毒があるか何があるか。それが問題であつた。

部屋に戻つて暫くすると酒と肴が運ばれてきた。用意がいいこと

だと思った。

「なくなりましたら持つて来ますので」

「なくなつたらですか」

「はい。何でしたら一度に持つて来ましょうか？」

「いや、それには及びませぬ」

この言葉から酒には毒はないことを読み取つた。これを飲んで死ぬというのならかわりを持つて来ることはないからだ。そして源介は。酒にはすこぶる強かつた。彼はここでこの屋敷の異形の者達を試してやろうとさえ思つた。

「ではなくなりましたら呼びますので」

「はい」

そして一人で濁つた酒を飲みはじめた。それは案外美味しいものであつた。

「ふむ」

いい酒だと思つた。肴はなくとも酒だけを飲める程である。瞬く間に飲んでしまった。

「成程な」

一つ飲み終えたところで彼等が何を狙っているのかわかつた。

「飲ませるつもりか」

そして酔い潰れたところを。それで納得がいった。

「だが相手が悪いな」

源介は杯を持つたまま不敵に笑つた。

「私を酒で潰すことは出来ぬ」

そう呟くと酒のかわりを頼んだ。

「もう一つお願いします」

「はいな」

すぐに徳利が運ばれてきた。それもすぐに飲み干す。三つ目の徳利も飲み干したところで酒を持つて来る女が変わつた。来たのはあの女であつた。

「姫様」

「うむ」

管姫は表面上はにこやかな笑みを浮かべて部屋に入ってきた。その手には徳利がある。

「酒をな。持って参った」

「姫様がですか」

「何か不都合でもあるかな」

「いえ」

表面ではそう答えてはいたが内面では違っていた。遂に元締めが来たと心の中で身構えていたのである。

「まさかと思いましたので」

「わらわも酒は嗜むぞ」

姫は妖しく笑ってこう述べた。誘う笑みであった。

「じゃがらそちも」

「既にかなり飲んでおりますが」

「もつとじゃ」

源介の杯にすかさず注いできた。

第五章

「ささ、もつとやれ」

「では御言葉に甘えまして」

彼はそれを飲む。あれよあれよという間に飲み干してしまった。

「これで宜しいので」

「ふうむ」

姫はその飲む姿を眺めて感心したように唸った。

「顔だけかと思つておつたが。酒もいけるのか」

「ええ、こちらには自信があります」

「豪傑じゃのう、頼もしいわ」

「頼もしいといいますと」

「御主、名は何という」

姫は源介の顔を見て問うてきた。

「何故ここで某の名を」

「そなたならよいと思つてな」

「それがしならばですか」

「いつもならここで。酔い潰して始末しておる」

姫の聲が急に冷たいものになった。見ればその手に持つ杯には姫の姿は映つてはいない。酒鏡に姿が映らない、これは姫の正体を物語つていた。

「また何故」

「弱い者は我等にはいらぬ」

姫は冷淡な声のまま述べた。酒の熱でさえ瞬く間に冷えてしまうのかと思える程冷たい言葉であつた。

「我等の世をここに作るのにはな」

「その世とは」

「人でない者達の世じゃ」

姫は言つた。源介が読んでいた通りであつた。やはりこの姫は異

形の者であり只ならぬものをその胸に秘めていたのであった。

「人でない、のですか」

「そうじゃ、まずは甲斐に信濃」

姫は言う。

「この二つの国を押さえそこからじわりじわりと天下を併呑していく」

語るその目が不気味に光っていた。赤く濁った光を放っていた。

「そしてな。この日本を我等が国とするのじゃ」

「人の国から妖かしの国へと」

「うむ」

姫は頷く。

「人から妖かしになればそれでよい。じゃが人である限りはいらぬ」
魔物達の完全な国にする為であった。その為には人は邪魔でしかないのである。

「我等の国の為には」

「では武田はどうされますか」

「武田か」

その名を聞いた姫の顔が邪悪な感じに歪んだ。

「決まっておる。滅ぼすわ」

「左様ですか」

「まずは武田からじゃ。あの武田晴信を憑き殺し甲斐を奪ってくれるわ」

「成程、そういうことですか」

それまでただ話を聞いていた源介の様子が徐々に変わりはじめていた。

「むっ!？」

「ならばこちらにも名乗りましょう」

「ほう、さぞ名のある者を見るが」

「それはどうかわかりませぬが」

そう前置きした上で述べる。

「名乗って宜しいですな」

「うむ」

姫は妖しく笑ってそれに応えた。源介はそれを受けて名乗りはじめた。

「それがしは春日源介と申します」

「春日源介」

「はい、そして今は縁あって武田晴信様に侍従として御仕えしております」

「何っ、武田に」

ここで姫の思惑が外れた。

「さらに申し上げますとこの村での怪異を収める為に晴信様より命じられここに参りました。すなわち」

「わらわを討つというのじゃな」

「左様で。御覚悟を」

「ふふふ、面白い」

だが姫はそう言われても余裕のある態度を崩してはいなかった。

「面白いとは」

「今までは詰まらぬ男共を糧としてきた」

「ではやはり一連の怪異も」

「左様。わらわが力を得るには人の精が必要なのだ」

それは明らかに魔物の言葉であった。

「それで糧としておった。じゃが所詮は詰まらぬ者達の精」

姫は言う。

「さして力にはならんだ。じゃが御主は違うようじゃな」

ゆっくりと立ち上がる。その周りに青白い火の玉が数個浮かび上がる。それによって現われる影は。人のものというよりは巨大な狐のものに近かった。

「管狐か」

源介は杯を放り投げ座ったまま刀の柄に手をやった。そのゆらゆらとした影を見据えながら言う。

「左様、わらわは狐よ」

姫もまたそれを認めた。

「それも管狐じゃ。千年生きたな」

「千年生きた狐は妖狐になるというが」

「わらわは他の狐とは少し違う。そもそもが管狐なのじゃからな」

この管狐という狐は狐であつて狐ではない。細長く、管に棲むことからこの名がついた。そして人に憑く。すなわち魔物であるのだ。

「そのわらわに。勝てると思うか」

「そうでなければここへは来ぬ」

源介は全く臆してはいなかった。

「来るがいい、姫よ。ここで成敗してくれる」

「殊勝よの、よいのは顔だけではないようじゃ」

姫は青白い狐火に照らされる源介の顔を見て述べた。

「そこまでの肝もあれば。ただ糧にするのは勿体ないのう」

「ではどうするつもりか」

「安心しやれ、心を奪わせてもらつ」

「心を」

「してわらわの臣となつてもらつぞ。わらわの国を作る為にな」

そこまで言うとその豪華な着物に覆われた右手を前に向けてきた。するとその着物の袖口から無数の細長い狐達が襲い掛かってきた。

「管狐っ」

「左様、管狐じゃ」

姫はその管狐達を放ちながら言う。

「妖かしの力を持ちし狐じゃ。かわせるかな？」

「かわす必要はない」

源介は姫にとっては意外なことに落ち着いた声であつた。

「瘦せ我慢を」

「瘦せ我慢かどうかは今見せよう」

それぞれ複雑な動きをして宙から襲い掛かる狐達。それが近付いたところで源介はその刃を煌かせた。

それは一つではなかった。一瞬の間に無数のきらめきが瞬く。それが終わった後畳の上には赤い血が舞い降りる。

「伊達に御館様の御側にいるわけではない」

源介はその刃を前に構えながら述べた。

第六章

「この程度の技ならば容易いこと」

「つまり狐にやられることはないというところか」

「そうだ。狐だけではない」

彼は言う。

「どの様な魔物にも。やられるつもりはない」

「殊勝よのう。惚れ惚れするわ」

その言葉を聞いた姫の目が細まる。それはまさに妖狐のそれであつた。

「惚れるわ、そなたが欲しい」

そして言う。

「わらわの婿として。欲しうなつたわ」

「生憎だが私は魔物の婿になるつもりはない」

源介は毅然として言い返す。

「御館様の為、武田の為」

「全てを賭けるというのじゃな」

「そうだ、私は武田の家臣春日源介」

そのうえでまた名乗る。

「それ以外の何者でもない。私は御館様の刀だ」

「刀ではないな」

姫はその言葉は打ち消した。

「そなたは。書じゃ」

「書!？」

「左様、わらわの実体もすぐに見抜いた。これはそこらの知恵ではできぬこと」

姫は源介が武芸だけではないということも見抜いていたのだ。

「知恵もある。そなたはそれで大きくなることじゃろう」

「ならばそれもよし」

源介にとっては刀であろうとも書であろうともよかったのだ。

「武田の為になるのなら。書にでも何でもなるうぞ」

「生憎じゃがそなたはわらわの書になるのじゃ」

姫はまだ源介を諦めてはいなかった。

「褥では人形に。その顔も惜しや」

「まだ諦めぬのか」

「覚えておけ。狐は諦めが悪いのじゃ」

今度は狐火を放ってきた。青白い火が源介を上から襲う。

「特に美しき男はのう。諦めぬぞえ」

「何のっ」

その火を唐竹斬りにする。一瞬のことであり今度は光さえ見えはしなかった。

「火では我が剣を止めぬぞ」

「今までならば既にこと切れておるのに。今の火をかわしたものはおらぬ」

「この様な遊戲で」

源介はきつと立ち上がった。

「武田を滅ぼせると思ったか！」

「ならばわらわも秘術を出そうぞ」

毅然として立つ源介を前にして妖しき言葉を出してきた。

「秘術！？」

「これは今まで使ったこともなかったわ」

姫は胸の前で印を結びはじめた。

「我等が管狐一族に伝わる秘術中の秘術」

「それを今から出すというのか」

「そうじゃ、今な」

その顔の笑みが凄みのあるものになってきていた。まるで般若の様な、そうした凄みのある笑みになるうとしていた。

「見せてつかわそう、管狐一族の秘術」

周りの狐火が激しく回りはじめる。その動きは徐々に速くなり、

しかも数も増えてきていた。

「これで決め手つかわしてやろうぞ」

印を解く。するとその回っていた火が一斉に源介に向かって放たれた。見ればそこには全て管狐がいた。

「狐が!？」

「火狐よ」

姫は身構える源介を見て笑っていた。勝利を確信した笑みであった。

「我が僕、火だけで倒せぬ場合にはその双方を使う」
彼女は言った。

「そういうことじゃ」

「狐と火か」

しかも数はこれまでのものとは比較にならぬものであった。それが部屋に満ち至るところから源介に襲い掛かる。これまで二度の攻撃を退けてきた彼も今度ばかりは駄目であるように思われた。

「案ずることはないぞ」

姫はその絶体絶命の源介に対して述べた。

「そなたはわらわが生き返らせてつかわすからな。わらわの婿として」

目が青く不気味に光っていた。

「して共に天下を目指すのじゃ。よいな」

「この世で天下を治めるに足る御方は一人のみ」

源介はその狐火達に囲まれながらも平然としていた。まだ肝は微動だにしてはいなかった。

「御館様のみ。他の者には天下は収まりきれぬわ」

「人には無理じゃ」

「否！」

源介は強い声で姫の言葉を否定した。

「人ならばこそだ」

それが彼の言葉であった。

「人ならばこそ天下を治めることができるのだ」

「世迷言を。今の乱れきった天下をどうして収めるというのか、人が」

「その乱れは人が起こしたものの、ならば人が収められるのは道理」
そう反論する。

「魔物の入るものではない。いらぬ節介だ」

「節介と申すのならば今わらわを退けてみせよ」

その言葉を耳にしても姫の余裕は変わりはない。

「さすればそなたも人も認めてつかわす」

「認めてもらうことはない」

彼はまた言い返した。

「何故なら。貴殿はここで倒すからだ」

「ではやってみせよ」

源介を挑発するようにして述べる。

「わらわの狐火。防げるものならばな」

「それを防ぐこともない」

源介の目が光った。

「ムッ!？」

「何故なら。貴殿ごとこの狐火も斬るからだ」

「殊勝な。これだけ取り囲まれてか」

今度の笑みは嘲笑であつた。

「肝が大きいのはよいがこれは」

「貴殿はさつき言つたな」

源介の言葉はその嘲笑を退ける程の強さがあつた。

「千年生きたと。それは確かに凄い」

「人には出来ぬことよな」

「それだけ生きたということはそれだけの力を身に着けられるということ。それで人が貴殿等に勝てることはない」

まずはそれを認めた。

「しかしだ」

だがすぐにそれを打ち消す。

「人はそれだけではない。人の命は短いがその実は何よりも濃いものだ」

「中身が違うとでも申すのか？」

「左様。そして今それを見せてやる」

一斉に襲い掛かる狐火達。それに白刃が舞う。

「生憎それでは我が僕達を押さえることはできぬぞ」

「ではこれでどうか」

源介は左右に動いた。身体が分かれる。

「一人で出来ぬのならば二人」

源介は刀を振るいながら言う。それだけで白刃の数が倍になった。

「二人で出来ぬのなら三人。決してしのげぬものではない」

「むうっ」

「これもまた人の技だ」

狐火達を斬り伏せながら言う。

第七章

「人は僅かな時間に多くのものを貪欲なまでに学ぶ。そう、貴殿等が長い時間を生きるのと同じだけのものをな」

「それで同じだと申すのか」

「そうだ、それを今見せてくれる」

狐火達を斬っていく。そして姫の気が一瞬怯んだのを見逃さなかった。

「これでっ」

今度は三人になった。その三人の源介が一斉に襲い掛かる。

「最後よっ」

三人で斬る。その速さ、その威力は千年生きた姫でさえかわすことは出来なかった。

三つの傷が姫の身体に刻み込まれた。その豪奢な着物すら切り裂き刻み込まれる。赤い鮮血が噴き出しそれは天井や畳まで染め上げた。

「がはっ」

「これが私の最後の技だ」

源介の身体が戻っていく。三人が二人に、そして一人に戻っていく。源介は一人となった。

「分け身の術だ」

「見事よのう」

姫は全身を己の血で染めながらもまた立っていた。その目で源介を見据えながら言う。

「まさか人がこれだけのものを持つておるとは」

「驚いたか」

「この千年ではじめて見たわ、ぬし程の者は」

「これが人なのだ」

源介の言葉は変わらなかった。勝ちにも何一つ驕ってはいなかった。

た。

「どれだけ生きようと。それで優劣が決まるわけではない。人もまた魔物に勝つことができるのだ」

「その様じゃな」

「最後にそれがわかったか」

「ふふふ、無念な筈じゃが」

姫は血に染まったその顔に凄みのある笑みを見せていた。

「ここまで天晴れな男じゃと。かえって腹が立たぬ」

「左様か」

「やはり。そなたとは添い遂げたかったのう」

「それは今はできぬ」

源介はそれは断った。

「今の私は武田家に全てを捧げているのだからな。人として」

「ではいずれわらわが人となるうぞ」

姫はふとそうした心を抱いた。

「して人であるそなたと」

「それは野心か」

源介は問う。

「天下を奪わんとする」

「であればどうする？」

「斬る」

造作もなく言つてのけた。

「武田の天下を害する者は誰であろうと斬る」

「ふふふ、よい言葉じゃ」

その言葉がさらに気に入ったようであった。

「安心せよ。天下よりよいものを見つけた」

「それは」

「ぬしじゃ。ぬしこそはわらわが欲しいものよ」

源介をいとおしげな目で見ていた。

「そうなつてもうたわ。口惜しいことにのう」

「さすればそれは次の世だ」

その言葉を源介も受け入れた。姫を見やつて述べる。

「今の世では無理だが」

「次の輪廻でな。会おうぞ」

最後の言葉となった。言い終えるとゆっくりと後ろに崩れ落ちていった。そのまま狐火達の火に包まれる。それが館全体に拡がるのにさして時間はかからなかった。源介はその燃え盛る館の中を一人静かに去るのであった。

館を出たところで。彼を出迎える者がいた。

「そなたは」

「お待ちしておりました」

館の門の前に大五郎がいた。小柄な身体をさらに屈めて源介に恭しく挨拶をしていた。

「全ては御済みになられたようですか」

「うむ」

燃え盛る館の方を振り向いて答えた。そこには紅蓮の炎があった。

「終わった。敵の首魁は見事討ち取った」

「左様ですか、それは何よりです」

「ところでだ」

源介はここに来るまでであることに気付いた。

「何か」

「あの従者や館の者がいなかったのだが。どうした」

「それは全て拙者が倒してしまいましたわ」

「そうか、御主がか」

「驚かれないので？」

「わかっていたからな」

源介はすつと笑ってこう述べた。

「御主は。只の庄屋ではあるまい」

「さてさて、何のことやら」

「いや、誤魔化す必要はない。その目を見ればわかる」

彼は言った。

「その目、そしてその動きは。忍びの者だな」

「おわかりでしたか。流石は春日様で」

「して私のことも知っていたか」

「はい。お察しの通り私めは忍びでもあります」

大五郎はにこりと笑ってそう述べた。

「元は真田にいたのですが何代か前にこちらに移り住みましてそれで」

「真田という」と

「はい、真田様にお仕えしておりました」

「そうだったのか」

信州の豪族の一つで清和源氏の流れを汲むとされている。近頃武田に接近してきており代々智謀と軍略の家とされている。

「ですが今は武田様に」

「そういう意味では私と同じだな」

ふと彼に親近感さえ抱いた。

「私もまた。流れて晴信様にお仕えしているのだから」

「何、今の世ではそれが当たり前ですぞ」

大五郎は笑って応えた。

「その身からの新参は」

「そうであるかな」

「ですから。それは御氣に召されることはありませんまい」

「うむ、ではそう思うでしょう」

「それよりですな」

「何じゃ？」

源介は大五郎の言葉に顔を向けた。怪訝そうな顔になる。

「何を為すかということこそが大事なのです」

「何を為すかか」

「見れば貴方様は大変いい相をしておられます」

「顔がいいというのは」

「いえ」

だがそうではないと。大五郎は首をゆっくりと横に振って述べた。
「顔の美しさと相はまた違うのです」

「そうなのか」

「そのうえで述べさせて頂きます」

彼は言った。

「貴方は。武田において必ずや大事を果たされるでしょう」

「左様か」

「え。そして後の世にもその名を知られる。そうした方になられます」

「それは望んではおらぬがな」

だが源介は後の世に名が知られるということにはあまり関心がないようであった。

「それはよいのですか」

「私は。そうしたことは望んではおらぬ」

それをはっきりと述べた。

「だが。御館様の為に大事を果たせるというのはよいことだ」

彼にとつてはそのことこそがまず重要であった。それを聞きその美しい顔を綻ばせる。

「まことにな」

「さすれば」

「うむ、私の腹はもう決まっていたが」

そしてまた述べる。

「武田家に。御館様に心からお仕えする。それが私の道だ」

「ではその道しかと歩まれますよう」

「うむ。してそなたは」

「私でございますか」

「どうするのだ？武田にお仕えするのか？それとも真田に」

「今のままでは同じことになると思いまするが」

「確かにな」

顔を綻ばせたままそれに頷く。真田が武田に仕えるということはそのまま彼も武田に仕えるということになるのである。

「どちらにお仕えしても。楽しきことになるでしょうな」

「ではまずは武田か」

「さて」

笑って言葉を誤魔化す。

「どちらでも同じならばより楽しき方を」

「真田は代々智謀の士だからのう」

「さすれど晴信様もまた」

「立派な方だぞ」

「ですから。悩むのでございます」

「ゆっくり考えればよいか」

源介は闇夜の中で明るく笑った。

「どちらにしろ楽しきことならな」

「そうですね。ではじっくりと考えさせて頂きます」

「ではまたな」

源介は別れの言葉をかけた。だが最後の別れではない。

「甲斐の館で会おうぞ」

「その時はまた」

「今度は戦さの場で」

「その御活躍、見せて頂きます」

「武田の為にな」

最後に爽やかに笑った。その美しい顔が夜の中に映える。

去っていく源介の後ろで管姫の館が燃え落ちていく。源介をそれを振り返ることなくそのまま甲斐へと帰っていくのであった。

2
0
0
6
.
8
.
2
6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418f/>

毒婦

2010年10月8日15時42分発行